

【暗証聖句】「このように聖であり、罪なく、汚れなく、罪人から離され、もろもろの天よりも高くされている大祭司こそ、わたしたちにとって必要な方なのです。」ヘブライ人への手紙 7 章 26 節

【今週のポイント】今週は祭司としてのイエス様について学びます。地上の祭司はイエス様の型でしたが、同じ点と全く異なる点がありました。

【日・人類のための祭司】

「大祭司はすべて人間の中から選ばれ、罪のための供え物やいけにえを献げるよう、人々のために神に仕える職に任命されています。大祭司は、自分自身も弱さを身にまとっているのです。無知な人、迷っている人を思いやることのできるのです。また、その弱さのゆえに、民のためだけでなく、自分自身のためにも、罪の贖いのために供え物を献げねばなりません。また、この光栄ある任務を、だれも自分で得るのではなく、アロンもそうであったように、神から召されて受けるのです。」ヘブライ 5 章 1~4

ヘブライ 5 章 1~4 に祭司も役割や特徴について、いくつかの重要なことが語られています。①罪のための供え物やいけにえを献げる。②大祭司は、自分自身も弱さを身にまとっているのです。無知な人、迷っている人を思いやることのできる。③自分自身のためにも、罪の贖いのために供え物を献げねばならない。④この光栄ある任務を…神から召されて受ける。これらのいくつかの特徴はイエス様みも当てはまります。

「同じようにキリストも、大祭司となる栄誉を御自分で得たのではなく、「あなたはわたしの子、わたしは今日、あなたを産んだ」と言われた方が、それをお与えになったのです。」ヘブライ 5 章 5

イエス様も父なる神様から大祭司として任命を受けました。

「キリストは御子であるにもかかわらず、多くの苦しみによって従順を学ばれました。そして、完全な者となられたので、御自分に従順であるすべての人々に対して、永遠の救いの源となり」ヘブライ 5 章 8, 9

人間の大祭司が弱さを身にまとっているように、イエス様も多くの苦しみにあわれ、私たちの弱さを知り、思いやることができます。しかし、イエス様は苦難によって憐み深くなられたのではなく、初めから憐み深い方でした。また、人間の祭司と違うのは、犠牲の動物ではなくご自分のお体をおささげになったこと。またイエス様は罪を犯されませんでしたので、ご自分のために犠牲をささげる必要はなかったことです。犠牲としてご自身をささげられたのは、すべてが私たちのためでした。

【月・メルキゼデクと同じような祭司】

ヘブライ 5 章 6 節で、神様がイエス様に対して、「あなたこそ永遠に、メルキゼデクと同じような祭司である」と言われたことが記されています。メルキゼデクとは、どのような人物なのでしょう。創世記 14 章 18 節を見ると、「いと高き神の祭司であったサレムの王」とありますが、詳しいことはわかりません。サレムとはエルサレムの古い言い方で、エルサレムには平和という意味がありますので、平和の王ということになります。また、メルキゼデクという名前には、「義の王」という意味があります。メルキゼデクは、アブラハムが東方の王たちとの戦いに勝利して帰還した際に、パンとぶどう酒を持って出迎えました。彼は、「いと高き神」の名によってアブラハムを祝福しました。するとアブラハムは、すべての分捕物の 10 分の 1 を彼に与えています。メルキゼデクがいかに偉大な人物であったかがわかります。また「彼には父もなく、母もなく、系図もなく、また、生涯の初めもなく、命の終わりもなく、神の子に似た者であって、永遠に祭司です」(ヘブライ 7:3) と書かれてあるために、受肉したキリストではないかという考える人もありますが、これは正しくありません。また天使でもありません。彼は「神の子に似た者」であり、イエス・キリストの型として働いたカナン人の王であり祭司でした。エレン・G・ホワイトは次のように言っています。「メルキゼデクを通して語られたのは、至高者である神の祭司であるキリストであった。メルキゼデクはキリストではなかったが、彼は世にあっては神の声であり、天父の代表

者であった。過去のすべての世代を通じてキリストはお語りになったのである。すなわち、キリストは彼の民を導き、世の光であられたのである」(セレクトッドメッセージ)

【火・真に罪を清めることの出来る祭司】

「ところで、もし、レビの系統の祭司制度によって、人が完全な状態に達することができたとすれば…いったいどうして、アロンと同じような祭司ではなく、メルキゼデクと同じような別の祭司が立てられる必要があるでしょう」(ヘブライ7:11)。

祭司とは神と人の間の仲保者ですが、レビ人の祭司は、完全な状態へと人々を導くことはできませんでした。それは祭司自身完全ではなかったからです。同様に、動物の犠牲も罪びとの良心を清めることはできませんでした。それらは来るべきイエス・キリストの真の清めの犠牲を指し示していたに過ぎませんでした。神様は彼らの奉仕を通して、人々の信仰を来るべき未来の「世の罪を取り除く神の小羊」なるイエス様の奉仕に向けさせたいと望まれたのです。ところで、ヘブライ7:12で、「祭司制度に変更があれば、律法にも必ず変更があるはずですよ」と言っています。律法では、レビ族の系統以外のものが祭司職につくことはできませんでした。イエス様はユダ族であり、レビ族ではありません。ユダ族は王の家系ですから、王としてのイエス様にふさわしいのですが、祭司としては、レビ族の祭司が完全へと導くことができなかつたので、律法が変えられレビ族以外から、すなわちメルキゼデクと同じような別の祭司が立てられる必要があつたわけです。イエス様はメルキゼデクのような祭司といわれる理由は、このような点にもあるわけです。

【水・永遠の祭司】

ヘブライ7章16、17節で、「この祭司(イエス様)は、肉の掟の律法によらず、朽ちることのない命の力によって立てられたのです。なぜなら、「あなたこそ永遠に、メルキゼデクと同じような祭司である」と証しされているからです。」と、書かれてあります。イエス様は朽ちることのない命の力によって立てられた永遠の祭司であり、後にも先にも、イエス様に勝る祭司が現れることはありません。イエス様の祭司としての働きは完全であり、永遠に最果てまで救うことができるのです。ヘブライ7章22節に、「このようにして、イエスはいつそう優れた契約の保証となられたのです」とありますが、これはイエス様が私たちの救いが完全であり、最終的なものであることの保証人となってくださったということです。保証人は、保証した人の負えない負債を肩代わりします。1万タラントの負債が許されるとえ話がありますが、1タラントは14年分の賃金なので、1万タラントは14万年分の賃金ということになり、計算することすらできない数字です。このようなあり得ない負債を、イエス様がすべて肩代わりしてくださったのです。祭司とは本来間を取り持つだけなのに、イエス様は自ら犠牲の動物となって、私たちに永遠の命を保証して下さっているのです。

【木・罪なき祭司】

ヘブライ人への手紙7章26節

「このように聖であり、罪なく、汚れなく、罪人から離され、もろもろの天よりも高くされている大祭司こそ、わたしたちにとって必要な方なのです」

イエス様は聖なる方であり、罪も汚れもありませんでした。犠牲のささげものは無傷でなければならなかつたとレビ記1章に規定されておりました。これは罪なきイエス様を象徴していたわけですが、死ぬ必要のない罪なき方が、私たち罪びとのために死んでくださったからこそ、その贖いの死は意味を持ったのです。悪魔は一言も口をはさむことはできませんでした。イエス様は「罪びとから離されて」天に戻っていかれましたが、この地上においてまったく罪がなかつたということも、罪人から離れてという言葉に含まれています。そして、ありとあらゆるものよりも高くされ、神の右の座につかれたのです。このような完全なる大祭司こそ、私たちに必要なのです。私たちの罪を唯一赦すことができ、その罪の中から救い出すことができる方だからです。